

自分たちでできることは自分たちで

松阪市飯高町波瀬地域は西端の高見山を境に奈良県東吉野村に接しており、1,000m級の山々に囲まれている山里である。地域の人々が高齢化や人口減を嘆くよりも、波瀬の魅力を伝え、「人の寄るまち」にしたいと前向きに生きる姿に、取材を通して感銘を受けた。

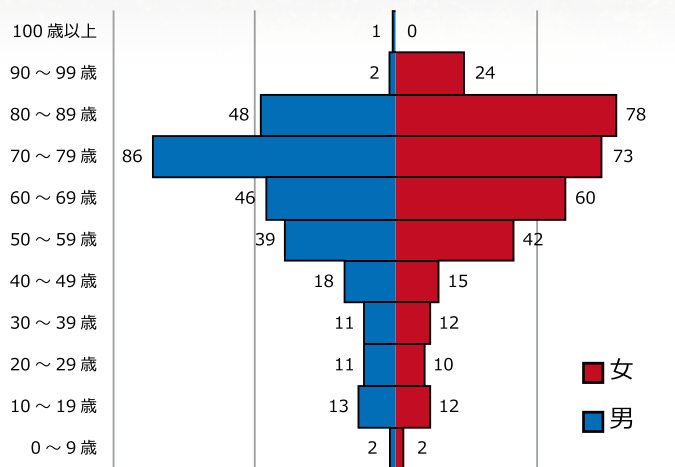
はげ
地域に残された住民の誇り、波瀬小学校が2008年（平成20年）3月末に休校、空き校舎となったことが背景にあり、人々の心を動かしている。

元々、地域の人々のむらづくりへの想いは強く、行政に頼るのではなく「自分たちでできることは自分たちでしよう」を合言葉に、2007年7月に“波瀬むらづくり協議会”[※]が設立され、住民の連帯感は一層高まった。

長年の地域ぐるみの活動が評価され、平成25年度豊かなむらづくり全国表彰において、日本農林漁業振興会会長賞・農林水産大臣賞を受賞し、今後への励みとなっている。

※1981年7月に設立された波瀬地域開発推進協議会を前身とする。

波瀬地区の人口ピラミッド（2013（平成25）年10月1日）



テントも自分たちで



“クレソンうどん”を打ち、伸ばす



アマゴつかみの後は焼く準備

「生きる」を学ぶ

自然、人、歴史、全ての生きとし生けるものの『生きる』を学ぶ体験学習のカリキュラムは、「限界集落に限界はない」を合言葉に、関西学院大学の学生たちや先生の協力を得て、地域の方々との話し合いを重ねながら、練り上げられ、つくられた。

「山」「川」「里」という3つのキーワードで構成された体験学習のインストラクターには、長年培ってきた技術や知識を持つ多くの地域住民が「達人」として携わっている。

山の達人、寺谷さんは波瀬の木々が見せる“いのちの循環”を学んでほしい、とパンフレットにメッセージを寄せた。

旧波瀬小学校も“波瀬ゆり館”として体験学習の場に利用され、松阪の小中学校の子どもたちのにぎやかな声が響くようになり、地域の人々の心の拠りどころともなっている。



飯盒（ごう）炊飯用の新割り

現場の実践から ～関西学院大学 人間福祉学部 橋川健祐 助教 インタビュー～

◆大学として良かった点は？



福島と三重の子どもの交流キャンプ

関西学院大学人間福祉学部は、現場の実践から学ぶことを第一にしている学部である。講義や本で学ぶには限界があり、現場の実際を、五感をフルに活用しながら気づき、考え、ときにはゆらぎながらも、まとめ、構想していくことが大切であると考えます。波瀬との関わりは丸7年になる。他大学などでのフィールドワークでは外部の目を生かす、若い感性で何かに取り組むといったことばかり取り上げられがちだが、常に「地域の人たちから学ぶ姿勢」を大切に、波瀬地域との関わりの中で学生だけでなく、教員も成長させていただいてきた。

◆学生の反応・感想や変化があれば？

実際に現場で起きていることに触れたり、直に住民から波瀬の良さや魅力を感じた学生は、学校に戻ってからも、そのことを他の学生たちに話してくれている。また、課題や困り事に直面したり、生の声を聴いた学生は、それに対して自分たちにできることがないかと考える。「現場に出る」ことは、学生にとってはハードルの高いことだと思うが、そこからしか生まれてこない自発性やアクションがあったのではないと思う。一度、波瀬に行くと、必ずといっていいほど「また行きたい」という声が聞かれる。波瀬の恵まれた自然環境もさることながら、あたたかく受け入れてくださり、さらには「また来てね」と声をかけてくださるからこそだと感じる。

<取材にご協力いただいた方>

波瀬むらづくり協議会 会長 福井 弘さん 事務局長 寺脇 充さん

関西学院大学 人間福祉学部 助教 橋川 健祐さん

URL <http://muradukuri-kyogikai.jimdo.com/>



協議会の役員さんを前に感想を発表する関西学院大学の学生たち



健康に役立つ食生活をテーマに発表する三重大の学生